Fukushima city 男女共同参画情報紙

さんかくBook

Vol.6
2022/SPRING

男女共同参画についての「あなたからのメッセージ」入賞作品

メッセージとイラスト
高校生の部　最優秀賞
福島西高等学校1年　髙木美沙希さん

メッセージとイラスト
小学校下学年の部　最優秀賞
清明小学校3年　髙橋柚希さん

メッセージとイラスト
小学校上学年の部　最優秀賞
福島第一小学校6年　赤間創さん

特集

- ワーク・ライフ・バランスについて考える！
- コロナ禍がもたらしたもの
  孤立・差別・暴力

紹介

- 「性の多様性を知る」講演会
- 男女共同参画についての「あなたからのメッセージ」入賞作品

5 ジェンダー平等を実現しよう
10 人や国の不平等をなくそう

ワーク・ライフ・バランスにむけた取り組み

福島市では、第３期「男女共同参画ふくしまプラン」を策定し、女性活躍やワーク・ライフ・バランスの推進のため、様々な事業に取り組んでいます。

ここでは、自分らしい働き方・生き方を見つけたい方や自分を見つめ直し、新たな可能性を見つけたい方を対象として開催した講座について、ご紹介いたします。

令和3年度 福島市 女性が輝くまちづくり推進事業

働き方・生き方アップデート 未来のじぶんをデザインしよう！ 全4回

一人ひとりに合った働き方・生き方を見つけ、これからの人生をデザイン！14名の方に“未来のじぶん”を発表していただきました。

講師

- ファシリテーター講師
  まちづくりファシリテーター 稲村 理紗さん
- アドバイザー講師
  ㈱ペンギンエデュケーション代表取締役 横田 智史さん

内容

第1回～第3回

✓**大切**にしたい思いは?
✓理想と現実の**ギャップ**はこれ!
✓**未来予想図**を作ってみよう!

第4回 「私のワーク・ライフ・シフト」ミニ発表会

私が3年後に目指す姿、実現するために今日から始めること&やめることなどを発表!受講生同士、エールを送り合いました。パチパチ

詳しくは、市HPをご覧ください。
福島市　働き方・生き方アップデート

受講した方の声

受講した感想

- ▶自分が働く上で、また生活する上で大切にしたいと思っていることをキャリアアンカーテストで分析し、改めて自分を考えるよい機会になった。
- ▶自分と同じような価値観を持った方や仕事をしている方と意見交換できたことが面白かった。
- ▶20代～80代まで様々な年齢の方がそれぞれの視点での働き方・生き方を考えていることを知ることができてとても興味深かった。
- ▶ワークとライフをじっくり考えることができたことが楽しかった。

これから挑戦してみたいこと

- ▶会社の資格取得支援を活用して、スキルアップしたい!
- ▶ライフとワークの融合
- ▶起業にチャレンジしてみたいなどなど、これからの夢や希望をたくさん伺う事が出来ました!

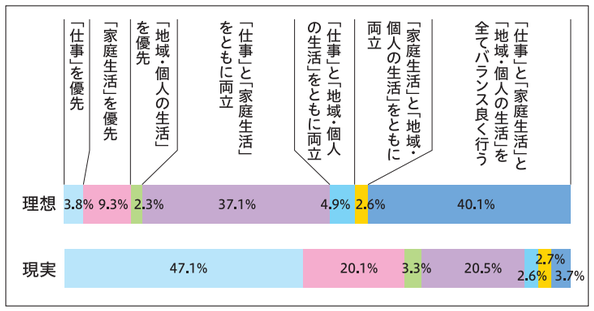
調査結果にみる、福島市民のワーク・ライフ・バランス

市民2,500人（男女各1,250人）を対象にした男女共同参画に関する意識調査を令和元年度に実施しました。

ワーク・ライフ・バランスについては、仕事と生活の理想と現実に大きなギャップがあり（問1）、家庭での家事、育児や介護等については、多くを妻が行っているという結果になりました。（問2）

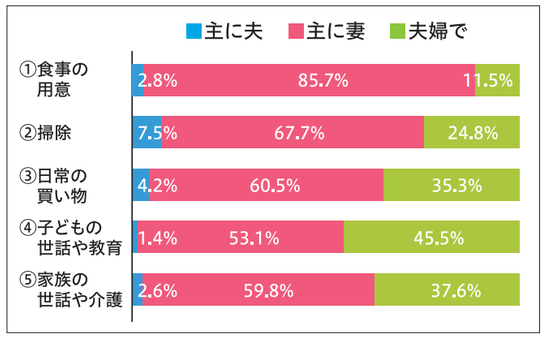
詳しくは、市HPをご覧ください。
男女共同参画ふくしまプラン

問１.仕事と生活について、あなたの考え方（理想）と現実（現状）にもっとも近いものを教えてください。



※男女共同参画に関する意識調査をもとに集計

問２.あなたの家庭では、次にあげるような家事、育児や介護等を、主にどなたが行っていますか。



特集 ワーク・ライフ・バランスについて考える！

福島市男女共生セミナー2021

ノンフィクション作家 小松 成美さん

今を生きる私たちのワーク&ライフ ～輝く自分をみつけるために～

令和3年11月23日(火)に、すべての人々がともに力をあわせ、その個性と能力を十分に発揮し、様々な分野においていきいきと活躍できる地域社会の実現を目指して、小松成美さんをお招きし、セミナーを開催しました。

講演では、新型コロナウイルス感染症やＳＤＧｓに関する話を交えながら、大きな課題に直面したときに、自分たちに何が出来るのかを考えることの大切さや、仕事と生活の調和、生きがいや使命感をもって生きることが、人生を豊かにする秘訣であることなどをお話ししていただきました。

その中で、アスリートやアーティスト、企業経営者など、これまで取材を行ってきた方々にも触れ、野球選手の大谷翔平さんは、決めたことを必ず行い、決して諦めないことで目標達成に至ったこと、卓球選手の石川佳純さんは、もっと強くなるという向上心を持ち続けて自分をより成長させたこと、障がい者の雇用で著名な日本理化学工業株式会社の故・大山泰弘会長の「働く幸せを享受していくことが、豊かな社会を築いていくために必要である」という思いなど、数々のエピソードをお話しいただき、私たち一人ひとりの輝く働き方や生き方について思いを巡らせる貴重な機会になりました。

小松成美さんへインタビュー

取材の際に心掛けていること

取材は常に緊張感をもって行っています。同時に、一期一会であっても、取材を受けていただいた方の内なる部分に触れさせていただけることに、心から感謝しています。

取材を受けていただく全ての方々が、必ず伝えたい思いを持っています。その思いを、時には時間をかけながら、急ぐことなく常に受け止めて原稿にし、読者に伝えられるように心掛けています。

取材の中で印象深かったこと

これまで、大きな功績を残した多くの方々に取材をさせていただきました。そのような方々であっても、繊細で自信がなかったり、孤独に苛まれることがあり、私たちと同じ時代、時間に生きる人なのだと感じました。選ぶことはとても難しいのですが、今まで取材させていただいてきた中で、印象深く残った二つの言葉があります。

一つ目は、イチローさんの「僕の挑戦にゴールはありません」という言葉です。私が創作活動を続けていく中で、作品を書くたびに、一つ一つの仕事の終わりは次なる挑戦のスタートなのだと、イチローさんの言葉を思い出しています。

二つ目は、中田英寿さんの「日本のサッカーがワールドカップで優勝する可能性はゼロではない。自分はその試合に勝利し、そしてその大会に優勝することを信じて戦う。それが代表の誇りであり役割である。」という言葉です。この言葉は、限りない可能性を秘めて人は前進することができるという〝挑戦する勇気〟を私に与え、執筆の世界でたくさんの取材の機会を得るきっかけになりました。

今を生きる中で大切だと思うこと

この先も執筆活動を続けていきたいと考えています。活動を続けていくためには、健康でいることや何かを書きたいという気持ちを持ち続けることが大切であると思っています。

また、震災や新型コロナウイルス感染症による苦境を経て、困っている方のために自分に何ができるのかを考えるようになりました。私自身も新型コロナウイルス感染症の影響により、何年もかけて準備を行ってきたオリンピック・パラリンピックの取材が全て行えなくなるなど、様々な困難に直面しましたが、自分自身は健康であり、支えてくださる方々がいたため、執筆の活動を続けることが出来ました。けれども、周りでは心と体を痛め、窮地に追い込まれている方が大勢いることを知り、自分に何が出来るかを考えるようになりました。そのため、私自身や親しい方々だけでなく、助けを求める姿すら見えない方々のために、力を尽くせる者でいるように心掛けています。

ノンフィクション作家
小松（こまつ） 成美（なるみ）さん

専門学校を卒業後、広告会社、放送局勤務を経て、1990年より本格的に執筆活動を開始。中田英寿やイチローなど、一流アスリートへの真摯な取材、磨き抜かれた文章により、数多くの人物ルポルタージュ、スポーツノンフィクションなどを執筆。現在は、執筆活動をはじめ、テレビ番組でのコメンテーターや講演など多岐にわたり活躍されています。

特集

コロナ禍がもたらしたもの

孤立・差別・暴力

「子ども食堂」の今 ―よしいだキッチン―

子どもたちの笑顔があるから頑張れる!!

新型コロナウイルス感染症の影響により、人と会う機会が減ったことで、孤独を感じる方や孤立化した家庭などが増えています。

コロナ禍にある今、子どもたちや家庭を支援する「子ども食堂」の様子を取材しました。

「子ども食堂」を始めたきっかけ

引きこもり対策が「子ども食堂」を立ち上げたきっかけです。例えば、就職ということではなく一歩下がった社会参画の方法として、人との繋がりや居場所づくりが大切であると考え、青年期の引きこもりの支援を行ってきました。みんなで鍋を囲んで食べるような雰囲気で、子どもだけではなく、ボランティアに参加される方も含め、強制はされずに自分のやりたいことを自分のタイミングで行えるような居場所となる「子ども食堂」を目指しています。

コロナ禍での変化

市民の方の意識の変化を感じています。「自分に何かできることはありませんか?」といった内容のご相談が多く寄せられ、組織や団体ばかりでなく、個人の方もボランティアに多く参加して下さるようになりました。また、メディアが注目し、取材等が増えたことで「子ども食堂」に対する地域の方の理解が進んだと感じています。

元々は、貧困対策への取り組みを行っておりましたが、地域づくりや街づくりといった繋がりに発展していきました。その中で、困っている子どもやご家族の声が、コロナ前と比べて格段に届くようになってきました。

課題や困っていること

「子ども食堂」を立ち上げた当初は、応援や一緒に活動してくださる方、地域の方々の理解も少ないなど課題が多くありました。しかし、参加してくださる方や理解のある方々が、ご自身の周りへ「子ども食堂」がどのような場所かを伝えてくださったことで、一人から二人、四人と連鎖的に協力者が増え、多くのことが解決していきました。

今後は、「子ども食堂」を増やして市内に約50ある小学校近くに設置すること、更なる理解増進を図っていくことが課題だと考えています。

悩んでいる子どもに対して私たちが出来ること

専門的な知識や技術は必要ありません。まずは、悩んでいる子どもの話を聴き、正面から向き合うことが大切だと思っています。

また、〝何が最適か〟は、子ども自身で決めることなので、挑戦に失敗したときに支えてあげることや、私たち自身が、やりたいことに取り組んでいる姿を見せることで、子どもに挑戦のきっかけや目標を与えていくことも大切だと思っています。

特定非営利活動法人
ビーンズふくしま
江藤（えとう） 大裕（だいすけ）さん

子ども食堂「よしいだキッチン」の主宰を務めながら、福島市子ども食堂NET事務局の活動をとおして、市内に25ヵ所の子ども食堂への支援や相談対応をされています。

江藤さんよりメッセージ

新型コロナウイルスの影響で、よしいだキッチンも通常通りの活動はできていない状況ですが、地域の皆さんのご協力のおかげで「今、必要なこと」と「今、できること」に丁寧に取り組むことができています。

これからもたくさんの繋がりの中で子どもたちを支えることができるように、皆さんと共に歩んでいきたいと思います。

子ども食堂の楽しいイベント

令和3年11月18日（木）に、子ども食堂「よしいだキッチン」でイベントが開催されました。輪投げやクジ引き、駄菓子屋などのブースでは、多くのお子さんやご家族がゲームに挑戦したり、景品を選んだりと、楽しいひと時を過ごしていました。

「子ども食堂」とは

みんなであたたかいご飯を囲んで、ちょっとだけ**ほっこり**する。
子どもたちにとって安心できる**居場所**。
ひとりひとりが繋がりあって、**地域全体**で子どもたちの育ちを支えていく。
それが「**子ども食堂**」です。

～みんなの笑顔が集まる場所～

シトラスリボンプロジェクト

「ただいま」「おかえり」の気持ちをリボンに結んで

コロナ禍で生まれた差別や偏見をきっかけに、愛媛県で始まったシトラスリボンプロジェクト。

ここでは、福島市内で行われたシトラスリボンに関する取り組みについていくつかご紹介いたします。

福島市内の取り組み

福島第四中学校、蓬莱中学校、北信中学校では、差別や偏見を無くし、新型コロナウイルス感染症対応にあたる方々に感謝の気持ちをこめて、生徒一人ひとりが作ったシトラスリボンを医療機関や市役所などに贈呈する活動に取り組みました。

また、企業や官公庁などでは、シトラスリボンの趣旨に賛同し、リボンを着用して勤務する姿も多く見られました。

福島市では、このような取り組みを広く知っていただくため、令和3年7月22日から26日までアオウゼで開催した「人権と平和展」や令和3年8月24日から9月11日まで街なか交流館で開催した「結（ゆい）アンブレラスカイ」で、シトラスリボンをテーマに展示を行いました。

◀アオウゼで開催された「人権と平和展」での展示の様子

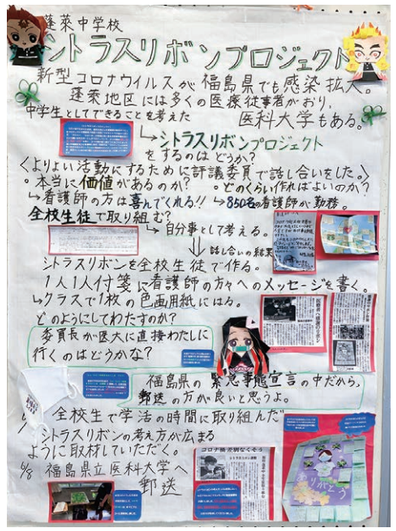
シトラスリボンプロジェクトとは

コロナ禍で生まれた差別、偏見を耳にした愛媛の有志がつくったプロジェクトです。愛媛特産の柑橘にちなみ、シトラス色のリボンや専用ロゴを身につけて、「ただいま」「おかえり」の気持ちを表す活動を広めています。リボンやロゴで表現する3つの輪は、**地域**と**家庭**と**職場**（もしくは**学校**）です。

Citrus Ribbon PROJECT公式サイトより引用

◀シトラスリボンプロジェクトに取り組んだ蓬莱中学校と北信中学校の皆さんがポスターを作ってくださいました。

生徒の皆さんが、シトラスリボンを作り始めたきっかけや取り組むにあたってみんなで考えたこと、取り組んでみての感想などが記載されています。（左写真）



蓬莱中学校の皆さんが作成したポスター

北信中学校の皆さんが作成したポスター

リボンキャンペーンとは

啓発や支援の意志を示すために、ピンクやレッドなどのカラーリボンを身につけたり、SNS等で発信する活動です。

ここでは、いくつかのカラーリボンについてご紹介いたします。

- ピンクリボン…乳がんに関する運動のシンボル
- レッドリボン…エイズに関する運動のシンボル
- オレンジリボン…子どもの虐待防止に関する運動のシンボル
- グリーンリボン…移植医療普及に関する運動のシンボル
- ブルーリボン…大腸がん治療に関する運動のシンボル
- パープルリボン…DV防止に関する運動のシンボル
- イエローリボン…障がいを持つ人たちの自立と社会参加に関する運動のシンボル

※上記内容はあくまでも一例です。

感染症を正しく理解し、行動しましょう!

新型コロナウイルスに感染された方やその関係者、医療従事者など感染症の拡大防止に向けて懸命に注力いただいている方々に対する不当な差別、偏見、いじめ、誹謗中傷は、人を傷つけ、地域の分断を招きます。情報を正しく理解し、他者への思いやりを持ちながら、落ち着いて行動しましょう。

- 感染した方は、病気の被害者です。
- 誹謗中傷は何の解決にもなりません。
- 正しい理解と対応を。
- 快復したら気持ちよく受け入れる環境づくりを（地域・学校・職場など）

深刻化するDV問題

DVは人権侵害ですすぐにご相談を！

内閣府男女共同参画局
女性に対する暴力根絶のためのシンボルマーク

DV（ドメスティック・バイオレンス）とは

配偶者や恋人など、親密な関係にあるパートナーから振るわれる暴力のことをいいます。ほとんどのDVは、さまざまな暴力が複雑に絡み合っており、犯罪ともなる行為を含む人権侵害です。

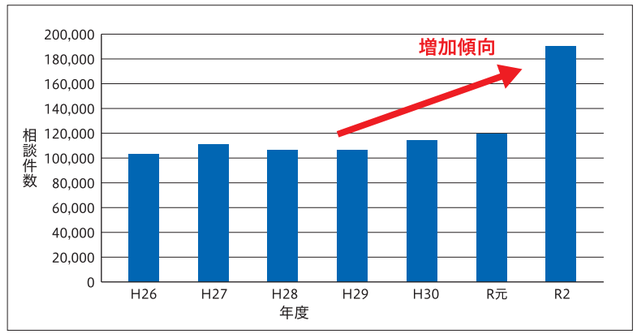
《身体的DV》なぐる・蹴る・物を投げつける　など
《精神的DV》モラルハラスメント（言葉の暴力）・無視する・見下す・大切にしている物を壊す　など
《経済的DV》生活費を渡さない・働かせない　など
《社会的DV》友人等との付き合いを制限する・行動を監視する　など
《性的DV》避妊に協力しない　など

国内の現状は

現在、コロナ禍の生活不安やストレス、外出自粛による在宅時間の増加等により、DV相談件数が増加しています。

全国の配偶者暴力相談支援センター等における相談状況を見ると、平成29年度以降、相談件数が増加傾向にあり、令和2年度については、新たな相談窓口「DV相談プラス」が開設されたこともあり、急激に増加しています。（表1）また、内閣府が令和2年度に全国20歳以上の男女を対象に行った調査によると、女性の約4人に1人がDV被害の経験があり、女性の方の被害経験の割合が高くなっています。

表1 全国の配偶者暴力相談支援センター等におけるDV相談件数



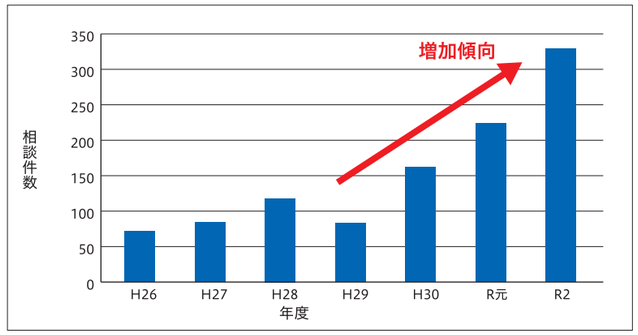
（参考）内閣府男女共同参画局調べより

福島市の現状は

福島市の女性相談窓口における相談状況を見ると、平成30年度以降、DVの相談件数が年々増加しています。（表2）最近は身体的DVだけでなく、精神的DVに、経済的DVや社会的DV等が複合的に生じている相談が多く寄せられています。

DV被害者が「DV相談プラス」や警察署に直接相談している場合もあることから、本市も全国と同様の傾向にあると想定され、実際にDV被害にあっている女性は、未相談者を含めるとさらに多いと捉えています。

表2 福島市の女性相談窓口におけるDV相談件数



（参考）福島市役所相談窓口調べより

被害者を救うために・福島市の取り組み

被害者の救済のために、国や県等の関係機関と連携して、様々な相談体制の周知や支援を行っています。

本市のこども家庭課では、女性相談を始め、妊娠前から出産、子育て期を含めた子どもと家庭を対象とした相談窓口を設置しています。

DVは場合によって生命の危険を伴います。緊急性がある場合は、警察や関係機関と連携して安全確保を最優先に対応しています。

なお、離婚やその後の生活等の相談については、内容に応じて法テラス等の専門機関、生活相談などの関係部署と連携して、相談者の不安解消とその後の自立に向けた支援を行っています。

児童虐待につながるDV

子どもの前でDVを行うことは、子どもに不安や恐怖を与えるため「面前DV」と呼ばれ児童虐待になります。

子どもがDVを見ていなくても、家庭内の緊張感や母親の感情が子どもに伝わり、赤ちゃんであっても心身の健やかな成長に影響が出ることもあるといわれています。

面前DVによる虐待を受けて育った子どもたちには、情緒不安定、無気力などの症状を表す場合があり、不登校やいじめなどの問題行動の要因の一つになると考えられています。

また、DVを受けた母親が子どもに対してネグレクト（養育放棄）などの虐待を行うことがあります。

DV被害者の多くは女性です。性別に起因する性差別的な社会がDVを生む土壌になっていることを理解し、基本的人権が尊重され、DVや児童虐待をはじめとする、暴力を容認しないことが大切です。

子どものえがおは、すべての人々のえがおにつながります。DVや児童虐待を防止し、子どものえがお満開の、えがおあふれる福島市を実現していきましょう。

福島市
児童虐待防止ももりん

西原理恵子先生描きおろし漫画

この漫画は、「ちくろ幼稚園」「ぼくんち」「毎日かあさん」など数多くの漫画を手がけ、またご自身もDV被害経験をお持ちである漫画家の西原理恵子さんが、内閣府男女共同参画局と協力して、より多くの方々に「女性に対する暴力」について関心を持っていただくために描かれたものです。

ほかにも、内閣府男女共同参画局の公式ホームページでは、西原さんが描かれた漫画や啓発ポスター、悩みを抱える方へのメッセージ動画やご自身の経験をお話しされたインタビュー動画などが掲載されておりますので、気になった方はぜひご覧ください。

詳しくは、内閣府男女共同参画局HPをご覧ください。

© 西原理恵子

内閣府
性犯罪・性暴力対策

性暴力に関するSNS相談「Cure time」（キュアタイム）

「内閣府男女共同参画局　女性に対する暴力をなくす運動の書きおろし漫画」

DV相談ナビ　#8008

DV相談ナビは、全国共通の電話番号「#8008（はれれば）」から相談機関を案内するサービスです。最寄りの配偶者暴力相談支援センター等につながり、直接ご相談いただくことができます。なお、ご利用には通話料がかかり、一部のIP電話、PHS等からはつながりません。

DV相談＋（プラス）

24時間対応の電話相談「フリーダイヤル0120－279－889」のほか、SNS・メール相談、WEB面談も行っています。外国語相談にも対応しています。

詳しくは、DV相談＋HPをご覧ください。

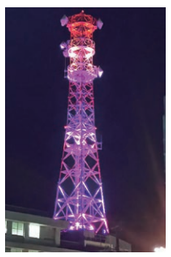
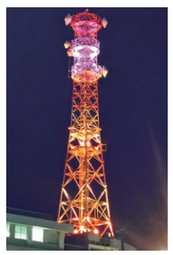
オレンジ・パープルリボン ライトアップキャンペーン

中心市街地を「オレンジ・パープル」にライトアップ

児童虐待と女性に対するあらゆる暴力の根絶を広く呼びかけるために、厚生労働省の児童虐待防止推進月間の「オレンジリボンキャンペーン」と、内閣府の女性に対する暴力をなくす運動の「パープル・ライトアップ※」を連携させた「子どもと女性をまもる、オレンジ・パープルリボンライトアップキャンペーン」を令和3年11月19日から25日にかけて実施いたしました。

キャンペーンのシンボルイベントとして、東北電力ネットワーク㈱福島電力センターのご協力により、福島駅前の鉄塔をオレンジとパープルの交互にライトアップしました。また、その他の取り組みとして、小中学生に対する「こどものけんり」しおりの配布や市内各施設に対する「DV相談ナビカード」の配布、令和3年度福島市児童虐待防止推進講演会を実施いたしました。

※パープル・ライトアップ
女性に対する暴力の予防と根絶に向けて、毎年11月12日から25日までの2週間「女性に対する暴力をなくす運動」が実施され、全国のタワーやランドマークを紫にライトアップしています。

◀東北電力ネットワーク㈱の鉄塔をライトアップした様子

相談窓口

福島市こども家庭課 8:30～17:15［土日・祝日・年末年始を除く］	TEL 024-525-3780
女性のための相談支援センター 9:00～21:00［祝日・年末年始を除く］	TEL 024-522-1010
福島県男女共生センター 火 9:00～12:00/13:00～16:00/17:00～20:00 水 13:00～17:00/18:00～20:00 木～日 9:00～12:00/13:00～16:00［月（祝日の場合はその翌日）・年末年始を除く］	TEL 0243-23-8320
DV相談ナビ 最寄りの配偶者暴力相談支援センター等につながります	TEL #8008（はれれば）
DV相談プラス 24時間受付	TEL 0120-279-889（つなぐ はやく）

一人で悩まずに、ご相談ください。

紹介

「性の多様性を知る」講演会

令和3年7月22日（木）に暁プロジェクト代表の大久保暁さんをお招きし「性の多様性を知る～違いを認め合う社会へ～」をテーマに講演会を開催いたしました。

講演では、性的指向（恋愛の対象がどこに向いているか）や性自認（自分が自分の性をどう認識しているか）などのLGBTQに関するお話しをいただきました。

その中で、LGBTQの方が身近な存在であると知ること、自分の価値観を押し付けず個性を伸ばすような言葉がけを行うこと、相談された際には例え詳しくなくても相手を否定せず話を聞いてあげることの大切さなどを、ご自身や周りの方々の体験談を交えながら、お話しいただきました。

暁project　代表
大久保（おおくぼ） 暁（あきら）さん

高知市出身。30歳を前にして、自分らしく生きる道を決意し、31歳で戸籍を男性に変更。当事者の集まりなどで堂々と生きている人を見て、自分らしく生きることの素晴らしさを知る。これまでの経験を少しでも悩んでいる人たちやご家族の心のケアに役立たせ、またセクシャルマイノリティの理解へとつなげるべく、「暁project」（あかつきプロジェクト）を立ち上げ、LGBTQの啓発活動をされています。

大久保暁さんよりメッセージ

性の多様性を知ることは決して特別なことでは無く、誰もが過ごしやすい社会になるための一歩です。こういう生き方をすることが『普通』というものはありません。それぞれの生き方があることが『普通』なのです。皆さん自身と、皆さんの周りの人の自分らしさを大切に出来る社会にしていきましょう。

紹介

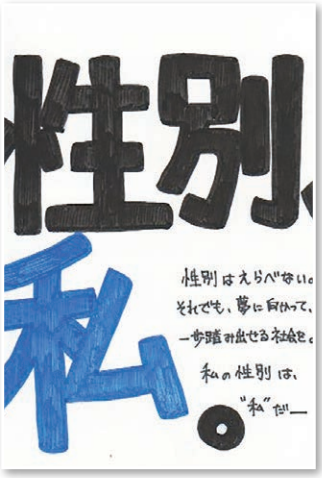
男女共同参画についての「あなたからのメッセージ」入賞作品

この事業は、男女共同参画を推進する事業として、平成18年より実施しています。
令和3年度は、1,326点の応募をいただきました。

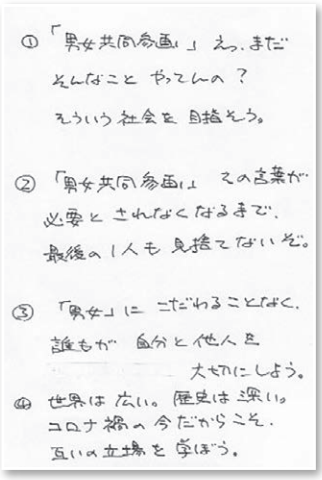
詳しくは、市HPをご覧ください。
福島市　あなたからのメッセージ

メッセージとイラスト
中学生の部　最優秀賞
信陵中学校3年
大内みゆきさん

メッセージとイラスト
一般の部　最優秀賞　山内圭介さん



メッセージ
高校生の部　最優秀賞
福島高等学校1年　渡辺莉央さん



メッセージ
一般の部　最優秀賞　角田康子さん

編集後記

さんかくBookを最後までご覧いただきありがとうございます。また、コロナ禍での取材にも関わらず、ご協力いただいた皆様へ編集委員一同、心より感謝申し上げます。

取材の中で、子ども食堂のボランティアに参加された皆さんと子どもたちの楽しそうな笑顔が心に残っています。お互いを思いやり助け合うことの大切さを強く感じました。

編集

さんかくBook
編集委員会
【市民編集委員（8名）】
小熊　剛
加藤　憲彦
佐藤　あけみ
佐藤　雅美
清野　篤志
竹中　大
西條　正美
宮﨑　恵美

DV相談カード

DV被害かもしれないと思ったら、是非一度ご相談下さい。
※裏面に相談先を記載しております。

福島市男女共同参画センター
ウィズ・もとまち

発行　福島市総務部男女共同参画センター
〒960-8035　福島市本町2番6号
Tel 024-525-3784　Fax 024-522-1528
ホームページ　http://www.city.fukushima.fukushima.jp/